

パラアスリートのスポーツキャリアの段階に応じた 心理・社会的課題と支援方略の検討

内田 若希*

抄録

パラアスリートは、競技者としてのキャリアの発達やセカンドキャリアへの移行を通して、様々な支援を必要とする。本研究では、パラアスリートのスポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的課題を検証し、支援方略を検討することを目的とした。

男性7名、女性7名を対象に、半構造化インタビューを実施した。対象者のうち、4名が先天性障害、10名が中途障害であった。また、1名のアスリートがすでに競技引退を迎えていた。得られたデータは、対象者が経験した課題と対処方法に焦点を当てながら、質的統合法により分析された。

数名のアスリートが、競技開始期において、障害のある子どもたちへの能力の気づきを高める機会の提供が重要であると述べた。一方、中途障害のパラアスリートにおいて、スポーツが生きる意味を再定義する一方で、競技開始や継続における心理的および環境的な課題を認識する必要性を感じているアスリートもみられた。

アスリート雇用に関してみると、競技引退後の人生について考慮する必要がある。大学やアスリート雇用を用いている企業は、パラアスリートがデュアルキャリアやセカンドキャリアを構築するための支援を提供する必要があるだろう。加えて、競技者アイデンティティとその他のアイデンティティの葛藤について言及したアスリートもみられた。競技以外のキャリア発達を促す支援が、この問題の解決につながるかもしれない。すでに競技引退を迎えたアスリートは、競技引退に関連する心理的および社会的な課題に言及した。また、多くのアスリートが、キャリアトランジションを通して、ナショナルレベルおよびJPCの科学的支援の強化を望んでいた。

キャリアトランジション全体を通して、パラアスリートによって経験された問題を明らかにしたことは、キャリア発達や引退後のセカンドキャリアへの支援を含め、パラアスリートの支援システム構築のための基礎を提供したといえよう。

キーワード：キャリアトランジション，競技引退，競技者アイデンティティ

*九州大学大学院人間環境学研究院 〒816-8580 福岡県春日市春日公園 6-1

Psychological and Social Problems and Support throughout Career Development and Transitions of Elite Para-athletes

Wakaki Uchida*

Abstract

Elite para-athletes need a range of support throughout their career development as competitive athletes and in transitioning to second career. We examined the psychological and social problems of the career transition process for Japanese para-athletes. We looked at experiences throughout their careers and focused on proactive provision of support.

We conducted semi-structured interviews with seven male and seven female elite para-athletes; four had congenital disabilities and 10 had acquired disabilities. One had already retired from competitive sport. Data were analyzed using the qualitative synthesis method, focusing on problems the subjects experienced and how they coped with them.

Some para-athletes expressed a crucial need to provide opportunities for children with disabilities to recognize what they are capable of through sport during the introductory stages. Another beneficial aspect, according to para-athletes with acquired disabilities, was that sport redefined their life's meaning, though they also felt a need to be aware of the psychological and environmental challenges of starting and continuing athletics.

Para-athletes also need to consider their lives after retiring from sport. Universities and companies that have systems set up for athlete employees should help para-athletes establish their dual/non-athletic career while athletes, and their career after retirement from athletics. Some athletes stated that their athletic identity conflicted with other aspects of their identity. Support for effective career development beyond sport might reduce this problem. The interviewee who had retired expressed psychological and social consequences of retirement from sport. Most of the interviewees hoped the government and the Japanese Paralympic Committee would improve scientific support systems for para-athletes throughout their career transitions.

Identification of problems experienced by elite para-athletes during career transitions would provide a foundation for creating a support system for these athletes that includes assistance with career development and with developing their second careers after retirement from athletics.

Key Words : career transition, retirement, athletic identity

*Faculty of Human-environment Studies, Kyushu University 6-1 Kasuga-koen, Kasuga, Fukuoka 816-8580, Japan

1. はじめに

近年、競技レベルの高まりを見せるパラリンピックは、厳しい条件をクリアした世界のトップアスリートだけが出場できる国際競技大会へと成長を遂げた。このような中、海外諸国では、次世代を担うジュニアアスリートのタレント発掘・育成にも本格的に乗り出している (e.g. Australia Institute of Sports)。わが国においても、プロとして活躍をするアスリートや競技志向の高いアスリートが輩出されるようになった。また、これまで厚生労働省の管轄であったパラリンピックの管轄が、オリンピックと同様の文部科学省に一本化されたことに加え、東京 2020 パラリンピック競技大会の開催が決定したことを受け、パラスポーツが今後ますます「競技スポーツ」として成熟していくことは間違いない。

スポーツにおけるキャリアトランジションとは、競技としてのスポーツ参加から引退後のセカンドキャリアへの移行までを含む。キャリアトランジションに関する研究は、この 30 年で大きく発展を遂げてきた。従来の研究では、障害のないアスリートを対象に、キャリア発達の段階、ジュニア期からシニア期への移行における課題、競技引退と引退後の生活への適応、およびスポーツにおけるライフスキル発達に関する研究が多くなされてきた (Ryba et al., 2015)。

これらの先行研究において、スポーツキャリア初期の競技者アイデンティティの獲得により、パフォーマンス向上、スポーツへのコミットメント、および社会的ネットワークの拡大 (Horton & Mack, 2000) がもたらされることが示されてきた。つまり、スポーツキャリア初期 (ジュニア期もしくは受傷後の競技開始期) において、競技者アイデンティティの獲得を促す心理・社会的支援の構築は、その後の充実したスポーツキャリアを迎えるために非常に重要といえる。

一方で、競技者アイデンティティを強く所有すると、アイデンティティのその他の側面を発達させることができず、過剰なオーバートレーニングを招いたり (Brewer, 1993)、引退時に感情的な喪失感を体験したりしやすい (田中, 2008) ことが明らかになっている。このことから、スポーツキャリア中期以降において、トレーニングと日常生活における多面的な自己成長を促し、充実したセカンドキャリアへの移行を支援する方略の構築が必要といえる。

しかしながら、パラアスリートにおけるキャリアトランジションの研究は、これまでのところほぼ皆無である。近年では、障害者雇用の法定雇用率達成と企業貢献などの観点から、パラアスリートを雇

用する企業数は増加の一途をたどっているが、アスリート雇用のメリットばかりに焦点が当てられ、そのデメリットや必要とされる支援は不透明なままであることも踏まえると、パラアスリートのキャリアトランジションにおける心理・社会的支援モデルの確立は急務であるといえよう。

2. 目的

本研究では、Wylleman & Lavallee (2003) のキャリアトランジションのモデルを援用した図 1 の枠組みに準拠し、① 障害の関連要因、② スポーツキャリア発達の関連要因、③ スポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的資源、および④ スポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的課題について、スポーツキャリアの段階や心理的発達に関連する人的要因とのダイナミックな関係性の中での変化を質的アプローチにより検証することを目的とする。それを踏まえて、スポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的支援の方略を探索することを目指す。

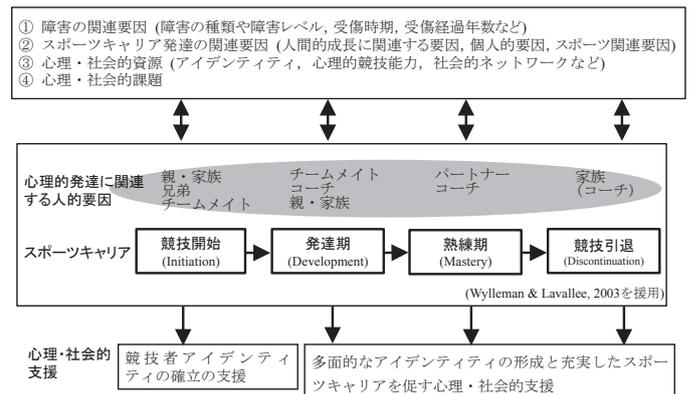


図1. 本研究の枠組み

3. 方法

1) 調査対象者

本研究では、道具的・多元的・説明的ケース研究デザイン (① 関心のある現象を経験している者が分析に適する, ② 複数の事例を用いて比較分析し, 新しい理論を作り出す, ③ 関心のある出来事を説明し, 説明的な概念を文中に組み込む) に基づき、理論的サンプリングを実施した (ウィリッグ, 2003)。

調査対象者は、20代—40代のエリート・パラアスリート 14名であった (男性7名, 女性7名)。うち男性1名は引退後に復帰しており、女性1名のみが現役を引退していた。調査対象者のすべてがパラリンピックもしくは世界選手権に出場しており、メダル獲得もしくは上位入賞を果たす競技レベルにあった。調査対象者の概要を表1に示す。

表1. 調査対象者の概要

ID	性	障害	種目	競技・仕事の環境	生活の環境
A	女	先天	団体	アスリート雇用*	未婚 (一人暮らし)
B	女	先天	個人	アスリート雇用	未婚 (一人暮らし)
C	女	先天	個人	アスリート雇用*	未婚 (実家)
D	女	中途	団体	アスリート雇用* (出社義務あり)	未婚 (一人暮らし)
E	女	中途	個人	アスリート雇用*	既婚, 子どもあり
F	女	中途	団体	講演活動など	既婚
G	女	中途	個人 (引退)	現役時は国家資格有職者	現役時は未婚 (一人暮らし)
H	男	先天	個人	国家資格有職者	未婚 (実家)
I	男	中途	個人	アスリート雇用 (出社義務あり)	既婚, 子どもあり
J	男	中途	個人	アスリート雇用	未婚 (一人暮らし)
K	男	中途	個人	引退後, アスリート雇用で復帰 (出社義務あり)	未婚 (一人暮らし)
L	男	中途	個人	アスリート雇用 (出社義務あり)	未婚 (一人暮らし)
M	男	中途	個人	大手企業勤務	未婚 (一人暮らし)
N	男	中途	個人	会社経営*	既婚

Note: 過去に一般企業等での勤務 (アルバイトやパート含む) 経験あり*

2) データ収集

対象者1名あたり, 1時間から1時間30分程度の半構造化インタビューを実施した。インタビューの内容は, 本人の許可を得てICレコーダで記録した。すべてのインタビューは, 障害の状況, 競技経験, キャリアの段階ごとの課題, キャリアの段階ごとの自己成長, 競技の目標, 引退後の生活, およびパラスポーツを取り巻く環境などに関するインタビューガイドに基づいて実施した。

なお, 本研究は, 事前に本研究者が所属する大学の倫理委員会による審査を受け, 承認を得てから実施された。

3) データ分析

本研究では, 山浦 (2012) を参考に, 質的統合法による分析を実施した。質的統合法とは, KJ法の基本原理と技術をもとに, 事例研究を重要視する研究領域において実践的に発展してきた手法である。事例研究では, 1つの事例のもつ個性や独自性を把握しつつ, そこに内在する論理を抽出して, 普遍性や法則性を追求することが主眼となる (山浦, 2012)。そして, 様々な背景を有する事例の実態を把握し, 事例間に共通する論理や事例全体を包括する論理を抽出し, 理論化を目指していく。具体的な分析手法を以下に記す。

(1) グループ編成

はじめに, ICレコーダに録音されたインタビュー内容の逐語録を作成した。数度にわたる精読を重ね, 発話を意味内容のまとまりで区切り, ラベルに転記した。なお, 挨拶や世間話など, 分析に必要ないと判断された発話は, この時点で分析から除外した。対象者1名あたり, 概ね70—120枚のラベルが作成された。

次に, 作成されたラベルを机の上にランダムに広げ, 数度にわたる精読を行い, 似ている内容のラベルを2—5枚ずつ集めた。集めた複数のラベルの内容を一文にまとめ, 新しいラベルに転記して表札を作成した。この表札を2回目の分析時のラベルとし, 最終的に5—10個のグループになるまで, 作業を繰り返した。

(2) 見取り図の作成と統合分析

作成された5—10個のグループを用いて, 関係を構造化した見取り図を個別に作成した。つぎに, 個別分析の見取り図をもとに論理を抽出して統合分析を実施し, 最終的な理論化を行った。

4) 質的アプローチにおける信頼性

Lincon & Guba (1985) の4つの基準 (Credibility, Transferability, Dependability, および Conceivability) に基づいて, 信頼性の評価を行った。本研究では, インタビュイーとの信頼関係を前提にインタビューを実施し, また複数の研究者による結果の吟味を行ったことから Credibility が保たれた。また, 各インタビューの逐語録は 21,528 文字から 47,408 文字にわたり, 豊富な逐語録が作成されたことから Transferability も十分であると考えられる。さらに, 協力研究者に質的アプローチに精通した研究者2名 (それぞれの専門は, 精神保健福祉学/ 法社会学およびスポーツ社会学を専門) を含んでおり, Dependability も担保されていた。質的研究に精通した第三者による方法論と結果の吟味を行っていないため, Conceivability は確保されなかったが, 上述した協力研究者により方法論と結果の吟味を行ったことおよび3つの信頼性の評価を満たしていることから, 本研究は十分な信頼性を備えているといえる。

4. 結果及び考察

統合分析の結果を以下に示す。なお, 抽出されたグループ名を【 】で記す。

1) 競技開始期から発達期における受傷時期の差異
競技開始期から発達期にかけて競技者アイデンティティが形成されていく過程は, 先天性およびジュニア期に受傷しているアスリートと中途障害のアスリートで異なっていた。まず, 先天性およびジュニア期に受傷しているアスリートにおいては, 統

合分析の結果 3 つのグループが抽出された。【ジュニア期のスポーツ開始】をみると、障害を子どもの個性と捉え、可能性への挑戦を後押しする親の存在が、スポーツの開始に大きな影響を与えていた。一方で、親が子どもの障害に着目している場合、本人の日常的な活動量も減少し、また周囲の視線が気になる気持ちとあいまって、スポーツは自分と無縁のものとして捉えていた。このような場合、地域やスポーツセンターでの体験会や、個人の障害や性格にあわせた種目の選択の支援、自己効力感を高めるような言語的説得および身体的・生理的变化への気づきの向上を意図した支援により、達成感や楽しさを覚え、ひいてはスポーツの継続につながっていくことが明らかになった。

このようにしてスポーツが開始された後、競技として取り組むようになると、競技開始期から発達期にかけて【ジュニア期の競技者アイデンティティの形成】が成されていくこととなる。トップアスリートやコーチからの言語的説得、トップアスリートや身近なアスリートのモデリングにより、競技そのものを楽しむ気持ち、自主性、目標設定、およびハングリー精神といった競技者アイデンティティの土台が形成されていく。そして、負けた試合からの学びや海外での挑戦などといった競技経験の増加の影響も受けながら、より競技に没頭していくことで競技者アイデンティティが確立されていた。

また、高校までの【文武両道の中での多様な進路選択】を実現する上での課題と支援策についても、複数のラベルが得られた。

以上のことから、ジュニア期の競技開始期においては、自身の可能性の気づきを深めるソフト面 (e.g. 親や教師)・ハード面の提供を支援していくことが肝要である。そして、多くのアスリートから、適切な競技者アイデンティティの土台の形成は、競技の継続や苦しいときの糧となることが述べられていたことから、ジュニアアスリートひとりひとりに目を向け、言語的説得やモデリングを効果的に用いながら育成していく必要がある。

中途障害のアスリートにおいては、【競技を通じた価値観の変化】および【受傷後の競技者アイデンティティの形成】の 2 つのグループが抽出された。中途障害の場合、受傷により喪失感や絶望感、自己否定や希死念慮などネガティブな心理状態を経験する。しかしながら、多くの場合、トップアスリートの存在や競技を観戦して身体の可能性を知ったり、重要な他者 (e.g. 家族、恋人、信頼する理学療法士) からの競技に関する情報の受領をきっかけに、スポーツを開始するに至り、目標の獲得、挑戦する気持ちや生きていく希望を持つことで、生きる

ことそのものへのモチベーションが喚起されていた。そして、様々な競技体験を通して生き方の視野の広がりや世界観の変化、社会的な居場所の獲得がもたらされることで、障害観そのものの変化に至っていた。先行研究においても、パラスポーツを通して、残存機能の可能性への気づきや受傷による喪失感からの脱却と生きる意味の再定義がなされることが指摘されており (内田ら, 2008)、競技開始期における中途障害者にとってのスポーツの意味は、非常に大きいと考えられる。実際に、この【競技を通じた価値観の変化】は、その後の【受傷後の競技者アイデンティティの形成】にも強く影響していくこととなる。

一方で、中途障害のアスリート特有の問題として、受傷前に競技経験がある場合や、身体能力が優れていると、経験があるためにすぐに勝ててしまったり、パラスポーツの競技レベルを低く見積もっていたりすることがある。また、遠征費用や日程などの情報が少ないまま日本代表に選出されてしまうこともある。これらの要因は、競技者アイデンティティの形成においてネガティブな影響を与えることがあるため、競技者としての意識の準備につながるような配慮が必要であろう。

2) アスリート雇用とデュアルキャリア

アスリート雇用とデュアルキャリアをとりまく要素として、4 つのグループが抽出された。まず、【アスリート雇用のメリットとデメリット】についてみると、競技に集中できることや練習環境を整えやすいこと、金銭的支援を受けられることがメリットとして挙げられた。その一方で、景気に左右されるといったリスクや、東京パラリンピックまでのブームの可能性の危惧、引退後の仕事に関する課題 (e.g. キャリアの遅れによる劣等感、目標を見いだせない) など、多くのデメリットが指摘された。また、出社義務のあるアスリート雇用の場合、社内で自分の役割を見いだせず違和感をもっていたり、求められる業務との両立で困難を抱えていたりするアスリートもみられた。

このような課題を解決するためには、インタビューで得られたアスリートの経験を踏まえると、大学や雇用先との連携による、デュアルキャリアやセカンドキャリアの支援が必要不可欠であると考えられる。たとえば、大学などの公開講座によるキャリアの支援や情報提供を行うことで、アスリートの将来的な選択肢の拡大につなげることや、雇用先の社員との距離感を埋めるような取り組みの実施の重要性について言及するアスリートがみられた。

デュアルキャリアを形成する過程で、大学進学を選択することは、将来につながるキャリアや資格の

取得、将来的な選択肢の増大、多様な人々と出会うことでの価値観の拡大など、多くの【大学進学による恩恵の獲得】をもたらす。一方で、競技と大学の両立においては、就学における大学の支援、両親の金銭的支援、両立をサポートしてくれる友人の存在、および金銭的負担削減のアスリート自身の努力(e.g. 奨学金や助成金の獲得) が必要となる。

将来的にスポーツに関わる職業を選択する場合には、【体育系大学への進学】を選択することで多くの恩恵を受けられる。履修時の両立への配慮、トレーニング施設の充実、および独自の医科学支援の体制といったハード面が充実しているだけでなく、科学的エビデンスを基に指導するコーチや切磋琢磨できるチームメイトの獲得など、ソフト面においても恩恵が得られやすいことが明らかになった。

また、競技一本に絞らずに仕事との両立を目指すためには、やるべき仕事をきちんとこなしたり、職場との両立に向けた提案や交渉、コミュニケーション不足による意識の齟齬の解消、活動を積極的に報告するなど、職場の理解を促進するためのアスリート自身の積極的な取り組みが必要となる。これにより、遠征時の公休扱いや仕事の調整、金銭的支援など、職場からの実質的な支援を獲得することが可能となっていた。さらに、両立可能な職場を探したり、生活スタイルにあわせたトレーニングや方法の確立、両立している他者のモデリングなど、様々な努力が見受けられた。これらに支えられ、仕事との両立が円滑にすすむと、引退後の仕事へのモチベーションの形成や選択肢の増加、2つのキャリアの融合や2つのキャリアの目標達成による自信と生活の充実感の向上がみられるだけでなく、両立の困難を乗り越えた中で生きていく上での経験値が培われることや、高い目標や経験値のある企業人との出会いを通して学びがあるといった【仕事との両立による恩恵の獲得】がみられた。

このように、デュアルキャリアを形成し、競技と仕事の両立を実現しているアスリートも多く、これらのアスリートの実際の努力や企業・大学の支援をモデルとして、セカンドキャリアに不安を抱くアスリートに示していくことが肝要であるといえよう。

3) アイデンティティの葛藤

熟練期において、競技者アイデンティティが強くなるほど、競技者アイデンティティ以外の【その他のアイデンティティ】との葛藤が大きな問題となる。競技に傾倒するあまり、精神的な余裕のなさや、オンとオフをうまく切り替えられず身体的負担や心理的ストレスへとつながるケースも見受けられた。また、日常生活や家庭生活にける時間配分が困難になったり、両立の中での身体的疲労や競技を優先す

ることで家庭をおざなりにしてしまう自分への心の葛藤などもみられた。加えて、子どもがいるアスリートにおいては、ほかの親との関係性構築に困難を抱えている様子も浮かげた。これらの要素はそれぞれが相互に関連し合い、アイデンティティの葛藤として表出されていた。

一方で、タイムマネジメントスキルの獲得や配偶者や子どもからの学びへの気づきがあったり、競技とそれ以外の側面の両方に目標を設定することでより生活が充実したアスリートにおいては、両立の中での成長を実感していた。これらのケースを踏まえると、アイデンティティに葛藤するアスリートへの支援として、認知の転換を促すような心理的支援が有効であると考えられる。

さらに、趣味や息抜きへの意欲の喪失や、女性としてのアイデンティティの喪失といった【競技者以外のアイデンティティ喪失】がみられるアスリートへの支援も必要である。女性競技者の転機(結婚、出産と競技復帰)への支援やデュアルキャリアの支援の充実が、これら【競技者以外のアイデンティティ喪失】の緩和に有効である。また、アイデンティティの葛藤における課題は、競技引退後のビジョンの形成とも関連することから、その支援の充実は急務であろう。

4) 競技引退

多くのアスリートが、【引退後のビジョン形成の重要性】について言及していた。競技だけで人生が終わるわけではないという認識のもと、結婚や就職を含めた競技中からの人生設計や、セカンドキャリアを見据えることの重要性を助言してくれる他者の存在が、【引退後のビジョン形成の重要性】の認識を高めていた。また、引退後のビジョンをもつことは、将来の仕事への不安を緩和したり、引退時期そのものも同時に見据えることで競技により集中し、達成感へとつながっていた。

競技引退を決定する要因は、身体的衰え、気持ちの衰え、ケガの増加といったネガティブな要因や、競技に対する達成感といったポジティブな要因が関連していた。そして、引退後は、達成感を感じつつも、戻りたい気持ちや過去を振り返っての後悔の念、現役アスリートへのうらやましさなどが混在する不安定な心理状態にある。このアンビバレントな感情の緩和には、スポーツへの向き合い方の変化や、新しい生活の充実感の獲得といった【引退時の心の葛藤と対処】が重要となる。

5) 競技力向上に向けて必要な支援

競技力向上に向けて必要な支援や課題に関して、統合分析の結果9個のグループが抽出された。競技開始期における【ジュニア育成のための環境整備】

として、一時的な発掘イベントの実施しかないことの問題点が指摘された。各自の地域に戻ってからの練習環境や用具がなければ継続しないことから、長期的な支援の確立が望まれる。とくに、先天性の障害や幼少時に受傷している子どもたちに対し、教師や親が挑戦の場を提供する態度をもつことや、学校体育などにおいても用具などを貸し出すことで可能性を広げていくことは、子どもたちの目標や自信の獲得につながる上でも重要であることが指摘された。このことは、上述した【ジュニア期のスポーツ開始】とも関連する内容であり、両親や教育現場を巻き込んだ、長期的な支援が重要であろう。

一方、競技開始期から発達期において抽出された【ジュニア・若手アスリートの意識改革の必要性】では、パラリンピックに容易に出られるといった安易な認識を植えつけてしまう指導者が見られたり、メディアに取り上げられることで浮き足立ってしまうアスリートや親が見られたりすることへの懸念が複数聞かれた。この時期の適切な競技者アイデンティティの形成は、後述のパラスポーツを通じた【人間的成長の重要性】とも関連することから、ジュニア・若手アスリートへの教育的な支援も必要と考えられる。この適切な競技者アイデンティティの形成には、モデルとなるアスリートの存在や競技経験を積む中で世界観の変化などが重要となることも明らかになった。

発達期から熟練期以降においては、競技力向上に直結する支援の必要性が聞かれた。すでに、日本パラリンピック委員会 (JPC) の医科学支援事業やマルチサポートなどの取り組みが開始されているものの、ソフト面・ハード面を含め、海外と比較していまだ遅れていると感じているアスリートが多かった。【JPC や国からの必要な支援】として、コーチやスタッフの専任化の促進、様々な海外遠征への医科学支援スタッフ (とくにトレーナー、心理サポートスタッフ、映像分析スタッフ) の派遣などが挙げられた。また、共同練習拠点となるような施設の確保や、医科学支援を定期的に受けられる施設の確保が挙げられた。そのほかにも、実際のアスリートのニーズと提供される医科学支援とのミスマッチの解消や、個人 (e.g. 障害、種目、性格) に合わせたオーダーメイド型の医科学支援を望む声が聞かれた。これらの課題は、JPC やマルチサポートの事業などにおいて着手が始まっているものもあり、今後の取り組みが期待される場所である。

ソフト面の基盤として、【コーチの資質】向上の重要性も多く指摘された。コーチには、アスリートの人間的成長の促進や競技以外のことも含めて適切な助言を行うことが役割として求められている。

そのためには、アスリートとともに学ぶ姿勢やアスリートのために活動する信念を持ち合わせ、アスリートからの信頼や尊敬を寄せられる資質を備えることが重要となる。

【団体種目での課題】として、モチベーションや練習状況の差異、経験値によるレベルの格差、雇用状況によるアスリート間の意識の齟齬は常に課題となる。これらの課題に起因し、数少ない合宿でのチーム練習に影響が出たり、仕事や金銭的理由による代表選出後の辞退や、競技意識の齟齬によるチーム内の不和などに発展することもある。このような状況の解消に向けて、チームビルディングを意図した支援が必要となると考えられた。

そのほかにも、競技に係る【金銭的サポート】、大きな競技大会になるほど重要となる【心理サポート】、競技団体の脆弱性の解消 (e.g. 運営負担軽減、人員配置による活動活性化) に向けた【競技団体の組織づくり】、自治体・地域との連携、および資金獲得につながる【パラスポーツの認知向上や環境充実に向けたアスリートの努力】、および海外の動向分析や語学力の向上といった【アスリート自身のスキルアップ】なども挙げられた。

6) パラスポーツを通じた人間的成長の重要性

多くのアスリートが、パラスポーツを通じた【人間的成長の重要性】について言及していた。競技を通じた自己変化への気づきとしては、外向性・社交性の向上やチャレンジ精神の喚起、充実感・達成感の獲得、他者への感謝などが挙げられた。またメンタルトレーニングなどの心理面強化により、目標設定、積極的思考、自立的思考などの自己変化への気づきが挙げられた。これらの人間的成長は、記録重視に偏向しがちな競技スポーツの世界において、一人の人間としての価値の形成や長期的な視座に立った充実した人生の構築に向けて、重要な役割を果たすことが示された。

また、これらの人間的成長を促す重要な他者として、障害者の枠を打ち破り、人間的な未熟さも指摘してくれるコーチや先輩アスリートの存在や、技術だけでなくともに学び高め合える、尊敬・信頼できるコーチの存在が挙げられた。このような人間的成長を視野にいれた教育的プログラムの充実も、指導者の資質向上とあわせて今後ますます必要となるであろう。

5. まとめ

本研究では、Wylleman & Lavallee (2003) のキャリアアトランジションのモデルに準拠し、パラアスリートのスポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的

課題を検証してきた。障害のないアスリートと異なり、パラアスリートの場合、ジュニア期に競技を始める者もいれば、中途障害を受傷後に競技を開始する者もいる。これらのアスリートにおいて、スポーツの果たす役割やキャリア発達に関連する人的要因には相違が見られ、求められる支援にも差異があった。発達期以降においては、競技者アイデンティティとそれ以外のアイデンティティの葛藤を抱えるアスリートがみられ、充実したスポーツキャリアの発達と競技引退を迎えるために、デュアルキャリアの形成を支援する重要性が明らかになった。また、パラスポーツを通じた人間的成長の重要性が多くのアスリートから聞かれ、発達期から熟練期にかけてアスリートの人間的成長を促すコーチの存在が、必要不可欠な人的要因であると考えられた。

本研究では、競技としてのスポーツ参加から引退後のセカンドキャリアへの移行までを含めたキャリアトランジションの視点から、パラアスリートによって経験された心理・社会的課題を明らかにし、キャリア発達や引退後のセカンドキャリアへの支援のための基礎を提示した。今後は、本研究で得られた選手サイドの知見を基盤とし、実際に支援に関わる企業、大学、自治体、およびナショナルレベルの事業担当者 (e.g. JPC, マルチサポート担当者) への調査を通して、包括的に検討していくことで、より充実した支援方略を構築することが望まれる。

参考文献

- Brewer, B.W. (1993). Self-identity and specific vulnerability to depressed mood. *Journal of Personality, 61*, 343–364.
- Horton, R.S. & Mack, D.E. (2000). Athletic identity in marathon runners: Functional focus or dysfunctional commitment? *Journal of Sport Behavior, 23* (2), 101–119.
- Lincon, Y.S. & Guba, E.G. (1985). *Naturalistic Inquiry*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Ryba, T.V., Ronkainen, N.J., & Selänne, H. (2015). Elite athletic career as a context for life design. *Journal of Vocational Behavior, June*, 47–55.
- 田中ウルヴェ京 (2008). スポーツ選手の将来不安—キャリアトランジションとストレス. *体育の科学, 58* (6), 394-399.
- 内田若希・橋本公雄・山崎将幸・永尾雄一・藤原大樹 (2008). 自己概念の多面的階層モデルの検討と運動・スポーツによる自己変容—中途身体障害者を対象として—. *スポーツ心理学研究, 35* (1), 1–16.

ウィリッグ, C.: 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至 (訳) (2003). 心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて—. 培風館.

Wylleman, P., & Lavallee, D. (2003). A developmental perspective on transitions faced by athletes. In M. Weiss (ED), *Developmental sport and exercise psychology: A lifespan perspective*. Morgantown, WV: Fitness Information Technology. pp. 502–507.

山浦晴男 (2012). 質的統合法入門—考え方と手順. 医学書院.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

